

宗教が青年期の意識構造に与える影響

横井 桃子

(発達教育学研究科心理学
専攻)

吉村 英

(教育学科教授)

問 題

宗教心理学は、近年ようやく科学的手法による実証的な研究が行われつつある分野である。宗教の心理学的研究については、Jung. C. や James. W. も宗教を対象とした著作を残しており、19世紀末から20世紀初めにかけてアメリカにおいて本格的に発展し、日本に輸入されたという歴史的な流れがある。しかしながら昭和初期までは、日本の宗教の心理学的研究は実証に基づかない非現実的なものであった。統計的手法が確立し、それが宗教研究にも適用されるようになったのは戦後のことである(杉山, 2001)。

宗教の心理学的研究がなされるようになった背景としては、おそらく社会変動による宗教ブームが1つに挙げられるだろう。高度経済成長という「物質的な豊かさ」の追求の時代、すなわち近代主義・資本主義の時代が到来し、さらに「物質的な豊かさ」の一応の完了に次いで今度は「こころの豊かさ」が追求されるようになる。その裏には、近代主義に対する懐疑や近代以前の自然主義への回帰の風潮があった。このような中からいわゆる新宗教の興隆や仏教書ブーム、若者に多くみられた占いなどのスピリチュアルブームが起こったというのが、日本の宗教心理学史の通説である。

宗教社会学者の大村(1990)はこの風潮を「ポスト・モダニズム」と称し、人びとの中に根付いている「基層心情(オカゲやタタリ的心情)」が近代化の社会変動とともに噴出した結果ではないかと考えている。彼はこの教団組織のない「民俗信仰」に着目し、これが教団組織や儀礼の存在する「創唱宗教」と対立するより

もむしろ、その土台となるものであるとした。この両者の関係から、浄土真宗の僧侶をはじめ宗教に携わる者が、今日の「ポスト・モダニズム」の時代に、人びとや社会に対してどのように対応していくかということを考える必要があるのではないかと問題提起している。

ところで「宗教」というものを研究対象とする場合、宗教の何を調べるのかという問題から出発する。岡(1969)はJames Martineauの「制度の宗教(礼拝、儀式、教団組織など)」と「個体の宗教(聖なる対象との直接交渉)」という宗教の2分類から、後者の方が宗教としてより基本的なものであり前者は2次的に存在しているに過ぎないとして、心理学ではこの「個人の宗教」を対象として研究すべきだとしている。しかし、心理学で扱う「宗教」が世を騒がせているような特定の宗教ではなく、時間的・空間的制約を超えて普遍的に存在するような宗教であるとするならば、おそらくその宗教の発展とともに教義が体系化され、多くの信者が組織化されている宗教のはずである。もし「個体の宗教」を対象として研究するにしても、その個人はある程度制度化された宗教集団の成員たりうるのであり、「制度の宗教」と「個体の宗教」とを完全に区別して研究することは不可能に近いのではないだろうか。

したがって現代の宗教心理学においては、宗教教団という宗教的共同体の要因を考慮して研究がなされるべきであり、本領域で多く行われている態度研究や性格研究に関しても、宗教教団に対する個人の態度や、宗教団体別での性格特性の傾向などが結果として示されている。

たとえば金児（1978, 1982, 1983）は真宗教団内で問題となっている僧侶と門信徒との信仰構造の乖離を科学的に明らかにしようという目的で調査を行っている。それによると、浄土真宗信仰者に期待されるべき宗教性を表す「真宗信仰の因子」は僧侶群・門信徒群ともに抽出されたが、人びとの基層心情である「民族宗教の因子¹⁾」が門信徒の因子構造の中のみに見られ、僧侶においては見られなかった。民族宗教性は一見浄土真宗の教義に反しているようであるが、その実、門信徒は現世利益信仰や祖先崇拜、氏神信仰と両立して浄土真宗を信仰しているという形をとっている。つまり門信徒においてはこの2つの因子が独立して存在することから、両因子ともに高い門信徒も存在すると予測でき、真宗信仰は民族宗教に支えられて成立しているという大村の理論と合致する結果となった。また民族宗教は家族や地縁・血縁の関係を再認識する「関係づけの儀礼」の機能を持ち、日本においてはこの共同体の関係を無視して世界宗教は成立しえない面がある。この点からも、宗教の個体的側面のみを扱うことは困難であると考えられる。

金児がこうした宗教教団内で立場の異なる信仰者を対象に研究を行う一方で、西山（1978）は5つの宗教・宗派の信仰者と一般男子学生の6つのグループについて宗教的パーソナリティの比較の研究を行っている。これは、権威主義尺度とカリフォルニア人格検査（CPI）を用いた調査で、それぞれで因子分析を行い、自我機制と社会性という2つの側面から性格を描写している。この研究で明らかになった浄土真宗信仰者の特性としては、因子分析の結果から、非権威主義的で自我統合的パーソナリティを示す。さらに、逃避性向因子の得点がやや高く現実回避的であり、またCPIにおける因子得点から非（脱）社会的な奔放さを持つという特性が明らかにされている。どの宗教グループも、自我機制・社会性のいずれも非宗教グループよりも安

定し調和したものであり、結局宗教は自我確立の促進要因として機能していると結論付けられている。

Fromm（1950）によれば、いかなる宗教も理念的には寛容、平等、博愛などに価値を置く人道主義的宗教であるが、宗教が絶対帰依の対象となり、体系化組織化が進むにつれて、他者に対する絶対的優越性を主張するようになるという。西山（1975）はこのことから、宗教における「理想と現実の相反する緊張関係が本質的性格として存在」していると考え、あるべき姿としての宗教という観点からみるとすべての宗教は人道的であり、あるがままの宗教という観点では常に理想態への近接であるとした。宗教信仰者のあるべき姿・理想的人間像というのが理想態であるとするれば、現実のあるがままの姿やあるべき姿へと向かおうとする姿を現実態とすることができるであろう。

本研究ではこの理想態と現実態について、浄土真宗信仰者がどのように自身をとらえているのかということに注目した。浄土真宗に限らず、世界宗教はそれぞれの教義や理念からその目標とされるべき人間像・人格像を掲げているが、各宗教信仰者たちがその理念に忠実な人間たりうるか否かは彼ら自身の経験や意識、行動などと関わってくる。また理想の姿へ近づこうと努力する過程では、現実の自身の姿と比べて悩み葛藤することもあるだろう。この真宗信仰者の理想態と現実態との間の乖離という観点から、西山（1978）の研究を基に宗教の意識構造への影響を考えていきたい。そのために本研究では、ファシズムの性格の強さを測定する権威主義尺度、社会性の程度を測定するカリフォルニア人格検査の2つの尺度に加え、浄土真宗信仰者としての望ましい人格特性をどの程度持ち合わせているかを測る「宗教的望ましい人格尺度」と、どの程度自己を受容しているか、あるいは理想と現実の間でどの程度葛藤があるのかを測定する「自己受容と葛藤尺度」を独自に作成し使用した。なお、権威主義的尺度とカリフォルニア人格検査については、西山の研究で用いられた下位因子のうち、非宗教グループと浄土真宗グ

1) 大村（1990）は「民俗信仰」、金児（1982）は「民族宗教」と表記しているが、意味する内容はどちらも同じである。

ループの間に有意な差が認められた因子を中心に選出して用いた。

このことを踏まえ、調査法による研究を行うために、以下に仮説を立てた。先行研究から、権威主義尺度においては理想態の方が現実態よりも得点は低く、非権威主義的特性を示すだろう（仮説1）。カリフォルニア人格検査においては理想態の方が現実態よりも得点が高く、対人関係における社会性などの特性が高いだろう（仮説2）。宗教的望ましい人格尺度の得点は、宗教に敬虔であるほど高く、より望ましい特性を示すだろう（仮説3）。宗教を信仰することによって、高い理想とのギャップに葛藤を抱くだろう（仮説4）。しかし一方では宗教を信仰することで、自己をより受容するようになるだろう（仮説5）。これらの仮説から、浄土真宗信仰者が自身のありのままの姿とあるべき姿をどのように捉え、そのギャップに対して葛藤を抱いているのか、それとも受容しているか、ということを実験によって明らかにしていきたい。

方法

1. 調査期間

2008年3-6月

2. 調査対象者

浄土真宗本願寺派得度習礼参加者、浄土真宗宗門系大学（R大学真宗学科・K女子大学教育学科）学生を対象に行った。信仰の有無による分類は以下ようになった。

浄土真宗を信仰する18-30歳の子弟・門信徒82名（男性68名 女性14名 平均年齢20.57歳）、信仰を持たない一般大学生（18-25歳）79名（男性12名 女性67名 平均年齢20.97歳）

3. 調査内容

- (1) フェイスシート：性別、年齢、信仰の有無、所属する宗教団体名
- (2) 宗教的敬虔さ尺度9項目5件法
- (3) パーソナリティの現実態と理想態について：権威主義尺度20項目4件法、カリフォルニア人格検査30項目4件法、宗教的望ましい人格尺度10項目4件法
- (4) 自己受容と葛藤尺度20項目5件法

なお、宗教敬虔さ尺度・宗教的望ましい人格尺度、自己受容と葛藤尺度については文献を参照しながら独自に作成した。権威主義尺度・カリフォルニア人格検査については比較したい下位尺度を中心に項目を選出し簡易版として作成した。また(3)については自身の現実態（ありのままの姿）と理想態（理想としている姿）の両方について問うた。

質問紙は講義時間での集団配布やその他個別配布など、さまざまな形で配布・回収を行った。回答に要する時間は20-30分程度であった。

結果と考察

分析に際して、浄土真宗信仰者を「宗教的敬虔さ尺度」得点の中央値30点で2つの群に分けた。すなわち、得点の高い方を「敬虔さ高群」（N=38）、得点の低い方を「敬虔さ低群」（N=44）、また特定の信仰を持たない者を「非宗教群」（N=79）として分析を行った。

1. 権威主義尺度（Fスケール）

この項目はAdorno, W. T.ら（1950）が開発したファシズム的人格の強さを測定するための質問紙尺度である。彼らの示した9つの下位尺度のうち本研究で比較検討した因子は、「因襲尊重」「権威主義的服従性」「権威主義的攻撃性」「迷信とステレオタイプ」「権力とタフネス」の5つであった（表1）。各因子に含まれる項目の評定値をもとに、因子ごとの平均値を算出した。各因子について、信仰グループの要因（非宗教群・敬虔さ低群・敬虔さ高群）と態の要因（現実態・理想態）の2要因で1要因に繰り返しのある分散分析を行った。ただし、態の要因は繰り返し要因である。「権威主義的服従性」「権威主義的攻撃性」「迷信とステレオタイプ」の3因子については態の主効果が見られた（ $F(1,153)=31.764, p=.000$ ； $F(1,146)=4.557, p=.034$ ； $F(1,153)=33.947, p=.000$ ）。「権力とタフネス」因子では態の主効果が有意であり（ $F(1,156)=42.343, p=.000$ ）、また交互作用も有意であった（ $F(2,156)=3.555, p=.031$ ）。交互作用が有意であったので、さらに単純主効果の検定を行っ

表1 権威主義尺度得点の平均（4点尺度）・標準偏差と分散分析結果

		非宗教群		敬虔さ低群		敬虔さ高群		態の主効果	群の主効果	交互作用
		M	SD	M	SD	M	SD			
因襲尊重	現実態	2.16	.45	2.12	.60	2.37	.55			
	理想態	2.29	.51	2.11	.57	2.33	.51			
権威主義的服従性	現実態	2.53	.34	2.43	.50	2.63	.38	**		
	理想態	2.72	.39	2.61	.51	2.68	.46			
権威主義的攻撃性	現実態	2.21	.36	2.27	.54	2.29	.47	*		
	理想態	2.22	.39	2.18	.46	2.16	.58			
迷信とステレオタイプ	現実態	2.16	.45	2.06	.45	2.08	.41	**		
	理想態	2.06	.50	1.88	.45	1.88	.42			
権力とタフネス	現実態	2.41	.52	2.55	.56	2.49	.49	**		*
	理想態	2.27	.51	2.20	.58	2.10	.53			

* p<.05; ** p<.01

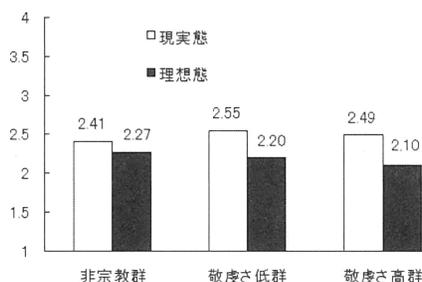


図1 「権力とタフネス」因子平均得点

たところ、図1に示すように非宗教群・敬虔さ低群・敬虔さ高群のそれぞれのグループにおける態の単純主効果が有意であった ($F(1,156) = 5.31, p = .022$; $F(1,156) = 18.10, p = .000$; $F(1,156) = 19.46, p = .000$)。群の単純主効果は見られなかった。

以上の結果から、「権威主義的服従性」は理想態の方が得点が高く、内集団の権威に追従的で無批判な態度をより強くとることを理想としている。一方「権威主義的攻撃性」と「迷信とステレオタイプ」については現実態の方が得点が高く、集団規範の違反者に対する排他的態度を緩和し、迷信・俗信の信仰や固定観念的思考を減らすべきだと評価している。また「権力とタフネス」では各グループそれぞれにおいて現実態より理想態の方が得点が低かった。交互作用があることから、支配-従属関係にとらわれない思考を理想としており、信仰が深まるにつ

れてその理想と現実とのギャップが大きくなると言える。

以上の結果から、仮説1は、「因襲尊重」と「権威主義的服従性」の2因子を除き支持された。

2. カリフォルニア人格検査 (CPI)

CPIは、いわゆる精神疾患のない健全な人びとを対象に開発されたものであり、その特徴は結果を“人間の社会的行動や対人関係に広く適用できる”ことである(我妻ら1967)。正式なCPIの質問項目は480項目あり、18の因子で構成されるが、本研究で用いた因子は表2に示した6因子であった。各因子に含まれる項目の評定値をもとに、因子ごとの平均値を算出した。各因子について、信仰グループの要因(3水準)と態の要因(2水準)の2要因で1要因に繰り返しのある分散分析を行った。ただし、態の要因は繰り返し要因である。「社交性」「社会的安定性」「自己満足感」「責任感」の4因子については、態の主効果が有意であった ($F(1,155) = 48.345, p = .000$; $F(1,149) = 35.552, p = .000$; $F(1,151) = 52.970, p = .000$; $F(1,149) = 139.840, p = .000$)。「自己統制力」因子は態の主効果 ($F(1,154) = 163.832, p = .000$) および群の主効果 ($F(2,154) = 7.473, p = .001$) が有意であった。群の主効果が有意であったので多重比較を行った結果、非宗教群と敬虔さ低群、敬虔さ低群と敬虔さ高群との間にそれぞれ有意な差がみられた。

表2 カリフォルニア人格検査の平均(4点尺度)・標準偏差と分散分析結果

		非宗教群		敬虔さ低群		敬虔さ高群		態の主効果	群の主効果	交互作用
		M	SD	M	SD	M	SD			
社交性	現実態	2.35	.41	2.35	.41	2.35	.44	**		
	理想態	2.72	.42	2.60	.43	2.63	.46			
社会的 安定性	現実態	2.36	.38	2.37	.39	2.35	.44	**		
	理想態	2.58	.34	2.57	.31	2.58	.42			
自己満足感	現実態	2.63	.36	2.53	.39	2.75	.46	**		
	理想態	2.95	.38	2.85	.47	2.93	.42			
責任感	現実態	2.64	.42	2.50	.42	2.68	.38	**		
	理想態	3.17	.47	3.01	.47	3.03	.44			
自己統制力	現実態	2.59	.64	2.13	.60	2.55	.62	**	**	
	理想態	3.23	.58	3.00	.66	3.30	.60			
融通性	現実態	2.51	.41	2.45	.57	2.47	.54			
	理想態	2.35	.39	2.39	.47	2.47	.51			

** p<.01

以上の分析の結果から、「社交性」「社会的安定性」「自己満足感」「責任感」の4因子については理想態の方が得点が高く、人付き合いの良さや対人関係における自発性や誠実性をより高め、自己に対してより多くの満足感や自信を得ることを理想としているといえる。また「自己統制力」因子は、敬虔さ低群が非宗教群と敬虔さ高群よりも得点が低く、また全体で比較してみると理想態の方が現実態よりも得点が高かった。つまり信仰の有無に関係なく、人びとは社交性をはじめとした対人関係に必要なスキルをより高めることを理想としているが、衝動性や自己中心性からの脱皮の程度は敬虔さ低群が他の2群よりも低いといえる。

以上の結果から、仮説2は「融通性」因子を除き支持された。さらに、「自己統制力」因子はグループ間でも有意差が見られた。

3. 宗教的望ましい人格尺度

この尺度はFスケール・CPIとは別に、浄土真宗信仰者としての姿・態度について測定するため、独自に作成したものである。本研究で得られたデータは三相データであるが、これを(調査対象者161名×2つの態)×10項目の二相データとして扱い、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。この分析で不適切な

2項目を削除し、残った8項目で再度同様の手法で因子分析を行った。固有値の推移(第1因子から順に2.19, 1.35, 0.94, 0.86, 0.85, 以下省略)ならびに解釈可能性からは、2因子が最も適切な因子数と判断された。2因子に指定したときの累積寄与率は44.24%であった。この結果を表3に示す。抽出された因子は「真実への帰依」「心のよりどころ」と命名された。「真実への帰依」は、超自然的なものを信じるか、迷信・俗信などを否定するかなどの項目から構成されている因子であった。また「心のよりどころ」は、どの程度心的な支えがあるかなどの項目から構成されていた。両因子とも4項目から構成された。

各因子に含まれる項目の評定値をもとに、因子ごとの平均値を算出した。この2因子について、各グループ・各態における比較を行うために、信仰グループの要因(3水準)と態の要因(2水準)の2要因で1要因に繰り返しのある分散分析を行った。ただし、態の要因は繰り返し要因である。図2, 3は各条件の平均値を示したものである。「真実への帰依」因子においては態の主効果($F(1,153)=80.436, p=.000$)と群の主効果($F(2,153)=8.424, p=.000$)が有意であった。交互作用は有意ではなかった。群の主効果が有意であったので多重比較を行ったと

表3 宗教的望ましい人格尺度 プロマックス回転後の因子負荷量

	第1因子 真実への帰依	第2因子 心のよりどころ	共通性
私の存在は、私を超えたものかによって守られている。	.64	.07	.46
私は悩みや苦しみがあっても精一杯生きようと思う。	.62	.09	.45
人生は占いや人相、家相によって決まっている。*	.42	-.19	.14
私の根本的な問題は、真実によって解決されると思う。	.42	-.07	.15
どんなことがあっても、私は見捨てられることはない。	-.03	.73	.52
みんなが、私と同じような心のよりどころを持てばよいと思う。	-.14	.43	.14
私は悩みや苦しみを解決せずにはいられない。	.05	.41	.19
生命には終わりがなく、私はあの世にも生まれるのだと思う。	-.04	.36	.12
寄与率	27.33	16.91	
累積寄与率	27.33	44.24	

*は逆転項目

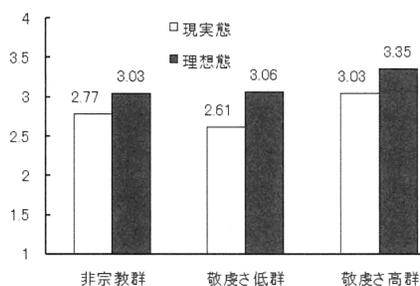


図2 「真実への帰依」因子平均得点

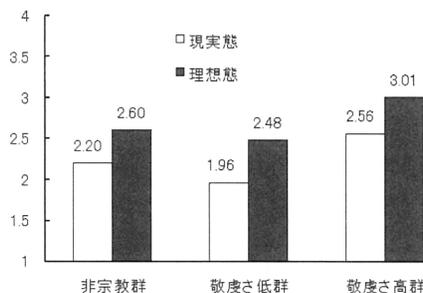


図3 「心のよりどころ」因子平均得点

ころ、敬虔さ高群と非宗教群・敬虔さ低群との間に差がみられた。つまり、敬虔さ高群が非宗教群と敬虔さ低群よりも得点が高く、また全体で比較してみると理想態の方が現実態よりも得点が高かった。したがって、どの群も超自然的な加護を信じ、迷信を否定したいということを目指して理想に考えており、特に敬虔さ高群は他の2群よりもその傾向が強いといえる。また「心のよりどころ」因子については、態の主効果 ($F(1,156) = 112.918, p = .000$) と群の主効果 ($F(2,156) = 13.736, p = .000$) が有意であった。交互作用は有意ではなかった。群の主効果が有意であったので多重比較を行ったところ、敬虔さ高群と非宗教群・敬虔さ低群との間に差がみられた。つまり、敬虔さ高群が非宗教群と敬虔さ低群よりも得点が高く、理想態の方が現実態よりも得点が高かった。したがって、どの群についても宗教的心的支えを理想として望んでおり、敬虔さ

高群は他の2群に比べて「心のよりどころ」因子の傾向が強いといえる。

以上の結果から、仮説3は支持されたと言える。

4. 自己受容と葛藤尺度

この尺度は、調査対象者が普段の生活においてどの程度自己を受容し認めているか、また理想とのギャップによってどの程度葛藤を抱えているかを調べるために独自に作成され、設定されている。

本研究で得られたデータについて、最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。この分析で不適切とみなされた6項目を除外し、残りの14項目で再度同様の手法で因子分析を行った。固有値の推移(第1因子から順に4.72, 2.05, 1.31, 0.99, 0.87, 0.79以下省略)ならびに解釈可能性から、3因子が最も適切な因子

表4 自己受容と葛藤尺度 プロマックス回転後の因子負荷量

	第1因子 理想に対する 葛藤	第2因子 自己受容	第3因子 自己不信感	共通性
自分に対して卑屈になったりする。	.84	-.03	-.07	.66
自分に失望することがある。	.79	.09	.05	.64
自分の現実と理想のギャップにしばしば苦しむ。	.76	.07	.05	.60
なぜ自分の理想通りに行動できないのかと悩む。	.74	.03	.04	.57
どんなときでも例外なく自分も失敗者だと思いがちだ。	.59	-.12	.00	.40
自分の行動を反省し、悔やむことが多い。	.59	.03	.12	.42
理想に近づきたいと思う。	.57	.04	-.16	.27
自分の理想とは違うことをやってみようという衝動にかられることがある。	.50	.00	-.08	.22
もう少し自分を尊敬できたならばと思う。	.43	-.15	-.05	.21
自分の個性を素直に受け入れている。	-.15	.80	.06	.68
自分なりの個性を大切にしている。	.06	.76	-.03	.58
私には私なりの人生があってもいいと思う。	.08	.63	.01	.39
自分の行動に疑問をもつことはない。*	.01	-.05	.98	1.00
私には欠点は全くない。*	-.10	.06	.47	.18
寄与率	33.73	14.62	9.32	
累積寄与率	33.73	48.35	57.67	

*は逆転項目

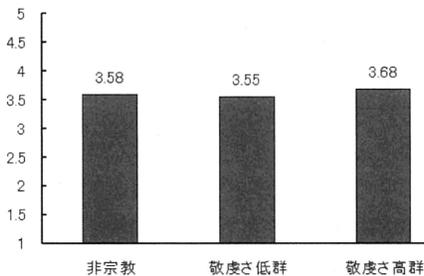


図4 「理想に対する葛藤」因子の平均得点

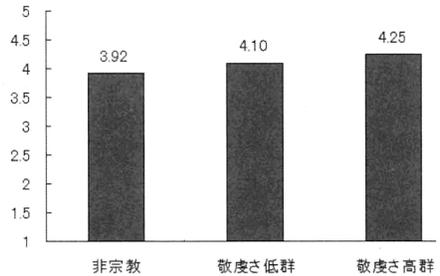


図6 「自己受容」因子の平均得点

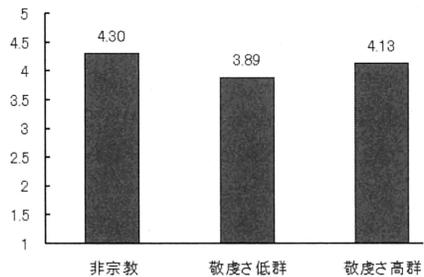


図5 「自己不信感」因子の平均得点

数と判断された。3因子に指定したときの累積寄与率は57.67%であった。この結果を表4に示す。抽出された因子は「理想に対する葛藤」「自己受容」「自己不信感」と命名された。「理想に対する葛藤」は、卑屈に感じたり自身に失望する、また現実と理想とのギャップによる苦悩などの9項目から構成されている。「自己受容」は、自身の個性の受容や、人生の受容などの3項目から構成されている。「自己不信感」は、

自分の行動や意識に対する疑問などの2項目から構成されている。

各因子に含まれる項目の評定地をもとに、因子ごとの平均値を算出した。この3因子それぞれについて、信仰グループ間での比較を行うために、一要因の分散分析を行った。図4、5、6は各因子の平均点を示したものである。「自己受容」因子と「自己不信感」因子において信仰グループ要因の主効果が有意であった ($F(2,157)=3.235, p=.042$; $F(2,157)=3.720, p=.026$)。主効果が有意であったので、TukeyのB法による下位検定を行ったところ、「自己受容」因子においては非宗教群と敬虔さ高群との間に、「自己不信感」因子は敬虔さ低群と非宗教群との間にそれぞれ差が見られた。なお、「理想に対する葛藤」因子においては有意な差は見られなかった。したがって、敬虔さ高群は非宗教群よりも自身の個性や人生を受容できており、また敬虔さ低群は非宗教群と比べて自身に対する不信感が少ないという結果となった。

以上から、仮説4は支持されず、仮説5が支持されたと言える。

総合考察

本研究では、青年期の人々が浄土真宗を信じることによってどのような意識構造を形成するか、特に、あるがままの姿(現実態)をどのように評価し、どのような姿が目指されるべきと考えているか(理想態)ということを明らかにするために検討を行った。また、理想の姿へと向かう中で、現実の姿との対比によって葛藤は起こらないのだろうか、逆に宗教を信仰することによって自分自身を受け入れることができるのだろうか、という問題についても検討した。このような問題意識をもとに、権威主義尺度、カリフォルニア検査、宗教的望ましい尺度、そして自己受容と葛藤尺度を用いて、非宗教信仰者と浄土真宗信仰者に対して回答を求めた。浄土真宗信仰者については、宗教的敬虔さ尺度によって信心深い敬虔さ高群と、あまり信仰が篤いとはいえない敬虔さ低群の2群に分けて分析を行った。

まず、権威主義尺度、カリフォルニア尺度、宗教的望ましい人格尺度の3尺度は、現実態と理想態の両態について回答を求めた。分析の結果、権威主義尺度の下位因子のうち、「権威主義的攻撃性」「迷信とステレオタイプ」の2因子においては群に関係なく現実態の得点が高かった。また「権力とタフネス」因子は交互作用が見られ3群それぞれにおいて現実態の得点が高かった。これは、人びとがより非権威主義的な性格を理想としていることを示している。ただし、「権威主義的服従性」因子においては理想態の方が得点が高く、人びとが内集団の権威に服従すべきだと理想を持っていることを示していた。ただし、いずれにしてもグループの間に差はなく、宗教信仰の有無に関係なく、青年期の日本人全体の意識構造の傾向であるといえることができるだろう。

またカリフォルニア人格検査については、「融通性」以外の5因子において理想態の得点が高く、より安定・調和した人間関係の構築を目指していることが分かった。ただし「自己統制力」因子については、敬虔さ低群が他の2群よりも得点が低く、衝動性や自己中心性の点で未熟さが残っている性格傾向であると言える。つまり、未熟さの解消には、宗教の信仰という要因だけでは不十分であり、他の何らかの影響が考えられるだろう。

権威主義尺度とカリフォルニア人格検査の2尺度に関しては、理想態でも現実態においても浄土真宗信仰者に固有の意識構造は得られなかった。したがって本研究においては、宗教信仰者が、宗教を信仰することで非信仰者よりも高い理想を持っているかということや、現実でもより優れた性格特性を有しているかということは明確にできなかった。

宗教的望ましい人格尺度については、因子分析を行い、「真実への帰依」と「心のよりどころ」の2つの因子が抽出された。この2因子について分析を行ったところ、両因子とも理想態の方が、また敬虔さ高群が他の2群よりも得点が高かった。これらの因子は超自然的な加護を信じているかということや、宗教的な心の支え

があるかという項目から構成されているため、信仰に篤い敬虔さ高群の得点が高いことは至極当然と言えるが、信仰の浅い敬虔さ低群は非宗教群と同程度の特性を示したため、「信仰者」といっても、宗教が彼らに対して心的な機能を果たしているとは言い難い結果となった。これは真宗教団からすれば宗門の解決すべき課題であり、彼らの信仰心をどのように高めていくかという更なる議論が必要である。

続いて自己受容と葛藤尺度については、因子分析の結果3因子「理想に対する葛藤」「自己受容」「自己不信感」が抽出された。この3因子について分散分析を行ったところ、「自己受容」因子においては非宗教群よりも敬虔さ高群の方が得点が高く、「自己不信感」因子においては非宗教群よりも敬虔さ低群の方が得点が低かった。「理想に対する葛藤」因子には有意差が見られなかった。これらの結果から、浄土真宗を篤く信仰する者は、理想と現実との対比によって葛藤を抱くというよりも、自身の個性や人生というものを受容し認めているということがわかった。無論彼らの人生は信仰に裏打ちされていることから、受容されるものの中には「宗教信仰者としての自分」という個性も含まれていると考えられる。一方、「自己不信感」因子の敬虔さ低群の低得点は何が影響しているのだろうか。先の3尺度の分析結果では「自己統制力」因子において敬虔さ低群の低得点が目立ったが、この因子と自己不信感が関連しているとは考えにくい。また自己不信感因子は2項目という少ない項目数から構成された因子であるため、この関係についてはさらなる検討が必要だと考えられる。

以上、真宗信仰の影響について現実態と理想態、そして受容と葛藤という観点から研究を行ったが、浄土真宗を篤く信仰する者は信仰の浅い者や非信仰者よりも自己受容の程度が大きいということが示唆された。また本研究では3つの尺度を用いて分析したが、信仰者に固有な特性はあくまで宗教的な意識や行動についてのみであり、権威主義的性格や人間関係などの社会性については、非信仰者と変わらない特性を

示した。

本研究の課題としては、尺度の十分な検討の必要性が挙げられる。今回は、権威主義尺度とカリフォルニア人格検査の2つの既成の尺度を用いたが、いずれも原本の項目数はかなり多く、調査対象者の負担にならない程度まで項目を削ることに苦心した。理想態と現実態の差を調べるために同一項目を2度回答してもらおうという形式のため、かなり少ない項目数となってしまった。したがって、ここには含まれていない因子が宗教信仰と関連があるという可能性も捨てきれないだろう。また独自に作成した敬虔さ尺度や宗教的望ましい人格尺度についても、信頼性や妥当性の観点から検討し、よりよい尺度の完成が望まれる。

最後に、宗教心理学の実証的研究は、その問題のデリケートな側面ゆえに、ある程度手軽でリスクの少ない質問紙票による調査研究が多く行われているきらいがあるが、それらの調査結果をもとに仮説をモデル化するためには、観察法などをはじめとしたフィールドワークが必要になってくるであろう。今回得られた結果においても、たとえば敬虔さ低群の「自己統制力」因子や「自己不信感」因子との関係は、表面上の尺度からは読み取ることができない。他にも、敬虔さ高群が自己のどのような側面を受容しているのかなどと言ったことは、面接法やインタビューによって明らかにすることが可能であろう。このような様々な手法によって、さらなるモデルの検討が求められている。そして、このようにマルチメソッド・アプローチによって明らかにされたことを、研究の枠を超えて様々な領域に応用していくことが宗教心理学研究の最大の目的であるように思われる。そのためにも、宗教心理学内外からの研究の蓄積や、あちこちに拡散した研究の体系化が、早急に必要とされていると言えよう。

引用文献

- Adorno, T. W. 1950 *The authoritarian personality*. New York: Harper & Brothers. 権威主義的パーソナリティ 田中義久, 矢沢修次郎, 小林修一訳

- Fromm, E. 1950 *Psychoanalysis and religion*. New Haven & London: Yale University Press. 精神分析と宗教 谷口隆之助, 早坂泰次郎訳
- 金児曉嗣 1978 宗教組織と信仰の機能Ⅲ—僧侶の宗教性に関する因子分析的研究— 伝道院紀要, 20, 1-42
- 金児曉嗣 1982 宗教組織と信仰の機能Ⅳ—浄土真宗門信徒の宗教性に関する因子分析的研究— 人文研究, 34, 30-58
- 金児曉嗣 1983 宗教組織と信仰の機能Ⅴ—浄土真宗門信徒の宗教性に関する因子分析的研究(その2)— 人文研究, 35, 1-47
- 西山俊彦 1975 宗教と権威主義—研究報告— サビエンチア, 9, 1-16
- 西山俊彦 1978 宗教的パーソナリティの実証的研究—補遺Ⅱ— サビエンチア, 12, 1-35
- 岡道固 1969 宗教の心理学的意義—ジェームスの定義を中心にして— 龍谷大学論集, 389・390, 239-249
- 大村英昭・金児曉嗣・佐々木正典 1990 ポスト・モダンの親鸞—真宗信仰と民俗信仰のあいだ— 同朋舎
- 杉山幸子 2001 日本における宗教心理学の歴史と現状 心理学評論, 44(3), 307-327
- 我妻洋・河口茂雄・白倉憲二 1967 カリフォルニア人格検査CPI: 日本版実施手引 誠信書房